

屑の上

彼は落下するここへ
便りも来ないこの地上
屑の上で暮らす
壁の前に腰掛け
時計を見つめる

心地良い表面に
隠れて腐った地底
屑の上に伸びた
木の枝の赤いツボミ
開花せず落ちた

からっぽの水瓶

周囲から鳴る言葉
歩いた道の草花
書かれた文字の断片
繋がり合う意識
与えられた印が外れて
ひとつの核が現れる

溢れることのない
からっぽの水瓶

誰にもそなわる光
認識した一握りに
積みも積もった本能と
苦悩と絶望のジェネレーション
価値を定めた戦いは
何時終わるともわかりはしない
溢れることのない
からっぽの水瓶

忘れた世界

やわらかいシワのすきま
写し出される姿形
手を加えて生まれたもの
おのずから認識されたもの
真逆さまに転げ回る
忘れた世界

取り上げられた行いは
異なった目で見下す
背景の中に生じる
現れた唯一の出口
作られたその場のありさま
忘れた世界

私の季節

窓に差し込む
明るい日射し
小鳥の声が
遅い朝を知らせ
時計は昼過ぎ
家中の静けさ

午後の日射し
きららかに強く
季節の変わりを告げる